

UDLM

9

vol.297

September 30th
2020

研究の道を辿って

- p.2 博士課程修了
濱田愛さんインタビュー
- p.3-4 デザ研の先生方に伺う
研究お悩み相談ラジオ

博士課程修了 濱田愛さんインタビュー

今年9月に都市デザイン研究室で博士課程を修了されたD3 濱田愛さんにインタビューを行った。これまでの研究の内容や、醍醐味・苦労など、様々な

内容についてお話を伺った。修士生の現在の研究に関する悩みに対するアドバイスもいただいた。

―博士論文のテーマ・内容について教えてください。

論文の題目は、「地域産業空間構造から見た東京都区部の都市部職住混合空間に関する研究」になります。

地域産業空間構造というのは、大田区や城東エリアなどの混合地域で分業的に広がっている、徒歩・自転車圏内の地域構造である地場産業ネットワークの、空間的な展開まで含めた概念を指しています。建物内の職住併存のみならず、エリアの中での職住近接が見られる混合地域を対象に、表出している職住混合空間と地域産業空間構造の関係性についての研究を行いました。

ケーススタディの対象地は、伝統的に皮革（靴）産業が集積している台東区北部地域です。

―卒業論文・修士論文から博士論文にはどのように繋がっているのですか？

卒業論文では、徳島県に立地する漁村集落を対象として、集落住民による自発的な移住施策や、人口構成の中で人の流動がどのように担保されているかを扱いました。修士論文でも地域の枠組みの中での流動を扱うという視点は変化していませんが、地方出身だからこそ都市部で研究を行いたいという思いから、台東区に着目しました。

対象地について悩んでいる時に、台東区のオープンファクトリー「エールウンド」で工場の中を見せってもらう機会があり、都心の真ん中に靴がずらりと並んでいる景色が印象に残り、対象地にしました。住工が併存する建築は、商業建築と比べて外装がシンプルな場合が多く外見からは分かりにくいのですが、その内側には生きたダイナミックな産業空間がある面白さがあります。

博士論文は主には修士論文を軸にその枠組みを広げる形をとり、修論の内容や位置づけを学会投稿などで整理して、足りないところを加えていく形で調査をするという研究スタイルでした。



▲台東区に立地する靴メーカーの事業所ビルの内部空間の様子

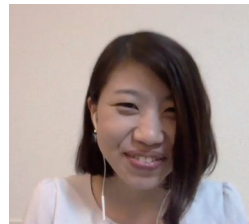
―何をきっかけに博士課程への進学を決めたのですか？

学部4年生のときに修士課程の院試に落ちて、就職活動をするかもう一度院試を受けるか悩んだことが、本当に大学院に行って研究したいのかを考えるきっかけになりました。先生方にも相談して、博士課程に進むなら秋入学で修士に入ったほうがいいのか、とアドバイスをいただいていたので、その時点で博士に進みたい気持ちはありました。

勉強や研究は好きだが、苦手意識もありました。同期や先輩後輩が修士で身につけた方法論を、自分は修士課程だけでは身につけられていないような気がして、もう少し大学に身を置きたいと思いました。

―研究の醍醐味や楽しさはどういうところにあると考えていますか？

正直模索中です。何か形ができた時や、自分の仮説が結果として現れた時には嬉しいなと思います。一方で、まだ研究の対象である地域や都市に成果を還元できるまでに行き着いてはいないので、机上の議論に留まらずにそこまで持っていけるようになりたいです。



▲zoomでのインタビューを行った（左：濱田さん 右：編集部鈴木）

―研究でどのようなことに苦労されましたか？

枠組みの設定が最も難しかったです。設定する枠組みが広すぎても狭すぎてもいけないので、研究の中でどこまで組み込むか苦労しました。「これやったら面白い」「こういう話もできる」と広がってしまうタイプで、修士の時は全然できませんでした。指導教官の中島先生に枝葉を切り落としていただく形で、枠組みの設定で先生のお力をお借りした部分も大きかったです。

枠組みを大きく取りすぎると、その分内容がさっぱりしてしまうことがあります。その一方で、色々な視点から議論したほうが深みが出るのも確かで、そこのバランスが難しいです。

特に修論は、狭く見て、できる範囲で深く掘るのがいいのではと思います。

もう一つ苦労したのは時間の使い方です。働きながらの研究だったので、オフィスアワーは会社に行き、夜は作業して、というのが体力的にきつかったです。その分、実践の場で生きた議論を聞くことができたので、視野が広がり、研究の相談もできました。社会との結びつきについての意識も変化し、働いたことで得られたこともたくさんありました。

―研究に悩める修士1年生、2年生にアドバイスををお願いします。

難しいですね... 具体的な悩みはありますか？

―研究の社会的意義が思いつきません、研究の背景、目的で設定すると思うが、それを見出すことができません。(M2より)

核心を突くような... (笑)

特にドクターに進むと、社会的意義や学術的位置づけが問われるが、その一方で自分の感覚とアカデミアの枠組みが一致しないことも多くあります。学会の論文や修士論文では自分のモチベーションになるような社会的枠組みとは別に、外から客観的に見たときの位置付けを二重に用意しなければならない気がしています。

違和感や元々持っていた問題意識は重要だと思います。私はその部分は博士論文のあとがきに書きましたが、背景で触れる場合もあるかと思っています。他の人の研究でも、その部分を知るとより研究のことを理解できることもあります。既往研究からしっかり位置付けていくときに、自分ならではの感覚と結びつけて示すのが難しいように思います。

―博士論文を通じて得た最大の気づきは何ですか？(M1より)

都市計画の枠組みの外があるんだということが博士論文を通してやっと見えました。広い視野で捉えないと、現実で起きていることと制度との関係が見えてこないということが分かりました。

方法論については、博士課程に入って、人と議論する機会が少なくなり、議論することの大切さに気付きました。インプットして考えることは大事ではあるが、先生との議論や研究室会議での発表、勉強会のメンバーとの議論など、議論している時に研究が進みました。

学生間でのカジュアルな意見交換会を開催してみてもいいかもしれません。研究室会議ほどのかっちりした資料を作らなくても、人の研究について話を聞いたり一緒に考えることも勉強になります。

濱田さん、ありがとうございました！ご修了おめでとうございます！

デザ研の先生方に伺う 研究お悩み相談ラジオ

研究に関する学生のお悩み（お便り）を募集して、都市デザイン研究室に所属される先生方に解決のヒントをいただくラジオ企画を行った。3人の先生方

にリレー形式で登場していただき、それぞれお便りに回答していただいた。お便りの全ての回答はwebマガジンに掲載するので、ご覧あれ。

TO 宮城俊作 先生

法律に反しているかもしれない動きにこそ、地域や住民のニーズがあらわれている気もするが、それを研究の中で肯定すべきか。特殊な事例をもって現行の制度を批評してもいいのだろうか ...
(P.N. M2 ムネオファンクラブ)

地域の人・民間事業者・行政にヒアリングするにあたって、コツとありますか、それぞれノウハウのようなものがあれば教えていただきたいです。
(P.N. M2 ジェリー・サンズ)

実務者から見て、学生の研究には何を求めていますか？
また、卒業制作には何を求めていますか？
(P.N. M1 オムライス)

TO 中島直人 先生

空間に落とし込んで議論したいのに大きな社会課題的なところから解像度が上がりません...
(P.N. M1 ごはん)

テーマを立て、しばらく調べると既往研究が見つかって、新規性のある視点がなかなか見出せない。自分なりのユニークな視点を見出すには何が必要ですか？
(P.N. M1 Fuji)

A. 現実には制度より先行するもの。方向性の提示を

法律に「反している」ではなくて、法律が「想定している範囲外」という認識でいいんですね。

経験したことから言うと、現実には制度より先行している。それを後追いするような形で、制度が修正されたり、新しく作られていく。制度が想定していないことに地域や住民のニーズが現れてくるのはそうだと思いますよ。ですから研究では現行制度をただ批判するのではなく、こういう方向性を持っていくべきだと示すことが大切ですね。

A. ヒアリングの対象と同じ目線になる

地域の人とは環境のエンドユーザー。民間事業者は環境を創って利益を上げようとしている人。行政は制度が想定している方向とそれらが大きくずれないようにすることと、公共性を持ち、それぞれに利益を享受してもらうかを考える人。ケースバイケースだから一般論としては答えは出ませんね。大事なことはそれぞれのヒアリングの対象と同じ視線の高さで同じ方向を向くこと。自分の知りたいことはあるが、相手と向き合っ

A. 新しいブレイクスルーの手がかり

新しいブレイクスルーの手がかりです。実務をやっていると、8割くらいは妥協なわけですよ。でも、妥協をせずになんとか打ち抜きたいということはある。妥協ばかりしているとどこで力を入れれば良いか鈍りますから、そういう中でみると、学生の研究は新鮮です。

学生は実務の人が何求めているかなんて考えなくていいと思いますよ。

卒業制作では、一緒にやって楽しいことが大事だね。私は横にいて、学生が先の方に抜けていってくださっている状況がいいな。僕の仕事はスループラスを出すこと。学生と向き合うとこっちは学生もしんどいよね。

A. 空間を突き詰めた先に社会的課題が見出せる

空間からも考えて、社会的背景と最後に結びつけることでうまくいくかも。まず自分がどういう空間について議論したいのかを考える。そして、なぜそこを議論したいと思ったか、直感を突き詰めていくと意識が無意識か、そこに課題意識や社会的背景があるはず。社会的課題に結びつかないものは都市の中で議論している限りないと思う。

みんなが課題だと思っていることを解くのもいいが、いま認識されていない、課題自体を発見するような研究だとインパクトがある。まさに研究の構想力である。同じものを見ていたとしてもそれをどこまで深掘りして社会的課題を見出せるかが求められている。

A. 新規性とは既往研究の『上』にあるもの

問いの立て方や課題の見つけ方があまりにも一般的なのかもしれない。問い自体を少しずらす、既往研究を批判的に読むことが必要かも。新規性とは誰も思いつかなかったものというより、他の誰かが調べているものの上にあるものという感じ。既往研究が全くないことの方が不安だと思うよ。

研究において、「その対象地に一般性がある」「その対象地だけに寄与する」、どちらがいいのでしょうか。

(P.N. M2 ジェリー・サンズ)

TO 永野真義 先生

自分の研究のオリジナリティを定める時に既往研究の整理が必須かと思いますが、そのコツはありますか？

(P.N. M2 関西人ちゃいまんねん)

修論のテーマを変更するか迷っています

(P.N. M1 ミズクラゲ)

現地調査の際、日中に情報をまとめるべきか、まとめは後回しにして夜のまちの散歩を楽しむべきか……

(P.N. M2 まるこていぼおる)

A. 一般性より対象地の位置付けを

研究なので具体的対象地に還元するというのは必要条件。だが、対象地だけに寄与する、というのは学術的にどうなんだろうという気もする。

一般性というよりも、対象地の位置付けがしっかりしていることが大切。対象地がある範囲の中で、その特徴や位置付けが分かれば、そこでの議論をどのように展開できるかが分かる。

いくつかの軸で特徴を表現したり、分類したりすることと合わせて、1つの事例を深めることで学術研究になる。統計的に分析していく研究とは質的に異なるので、求められる「一般性」も異なる。

A. 2軸を定めて4象限で整理すると見えてきます

既往研究の探し方としては自分の研究に近い研究の参考文献を当たっていくのがやりやすいですね。

整理するときには、2軸を定めて4象限で整理すると、どこが研究されていて、自分の研究はどこなのかが見えてきます。3軸にしたいのですが、それは無理なので1軸でフィルタリングした上で2軸にまとめるのも手です。

修論提出後、審査前に開催される発表リハをM1も聞くと参考になると思いますよ！

A. 知的好奇心が湧くものが見つかったら◎

M1ならまだいいんじゃないですか(笑)

踏ん切りをつける時期はM2の頭かな。論文を書くのも目的ではありますが、知的好奇心が一番大事。知的好奇心が湧くところに行った方がよい。社会人になっても芯として残り続けるもの。この先10年間やりたかったものが見つければ変更してもいいのでは？

A. 悩むなら夜の散歩を楽しんで

夜の街の散歩は非常に大事。悩むなら夜の散歩を楽しんだらいいんじゃない？ラインで自分にメッセージ送ったり、一人スラックとかして移動時間にまとめはやっちゃうのも良い気もしますね。

研究のやる気が出てきましたね！先生方、ありがとうございました！

COLUMN

BOOK OF THE MONTH



京都と近代
せめぎ合う
都市空間の歴史
中川 理
(2015)

推薦者
M2 沼田

副題にある「せめぎ合う都市空間」とはまさに当時の京都を端的に表していると感じたが、一方で今でもほとんどの都市にせめぎ合いはあるのではないだろうか。せめぎ合いの果ての「折り合い」を如何につけるか、それを考えさせてくれる一冊だと思います。

※画像は <http://www.kajima-publishing.co.jp/> より引用

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
<https://udy.u-tokyo.ac.jp/a/blog/>



小高 PJ 菜園講習会

震災から約9年半が経過した小高の地を訪れ、「まちなか菜園」の手入れと MTG を行いました。菜園の整備を通じて、地域に生じた空地の効果的な利用方法を探っていきます。(M1 藤本)



宇治 PJ 研究室ミーティング

中宇治のランドデザインの骨格作成に向けてリサーチの共有と作業方針を議論しました。今年度初の研究室でのミーティングということで作成した地形模型を使いながら有意義な議論ができました。(M1 河崎)

LOOKING BACK AT SEPTEMBER

5-6th 小高 PJ 菜園講習会
16th 宇治 PJ オフライン mtg
20th 手賀沼 PJ SUP・生き物観察会
研究室会議 7th, 15th, 29th

POSTSCRIPT

研究の悩み、それが今月の企画の出発点であった。先生方、研究室メンバーと対面で議論できる機会が少ない昨今、悩みを晴らし、研究の情熱が湧く契機となる記事になればと期待している。(M1 鈴木)